TRAFFIC ADVICE

★交通教育センターから

【（株）シーテック／セーフティ・エコドライブ研修】

エコドライブと安全運転の両立をめざすための研修

凍結路や圧雪路など、すべりやすい路面を再現したスキッドコースを使って、ふんわりアクセル『eスタート』に必要なアクセル操作をトレーニング

（株）シーテック（本社：愛知県名古屋市）は中部電力のグループ会社の1つで、電力技術を中核に建設、情報通信から新エネルギー事業などを展開する企業である。同社は昨年、環境問題への取組みとして、平成21年4月より全社でセーフティ・エコドライブを導入することを決定した。

こうした取組みを行う背景を、同社安全・品質部長の梅田賢治さんは次のように話す。「当社は風力発電や地域熱供給など、環境保全に対応する事業も手がけています。エコドライブの推進によって、社員一人ひとりの環境保全に対する参画意識を高め、CO2削減に寄与すると共に、エコドライブを安全運転に役立て、交通事故防止にもつなげていきたいと考えています。導入に向けては、まず各部署における推進役となる『セーフティ・エコドライブリーダー』を養成することにしました。そのために、エコドライブに関する知識と、実技を通してそのノウハウを身につけてもらうためのセーフティ・エコドライブ研修を昨年12月から始めました」。

1月20日（当日）は、全9回のうち8回目の鈴鹿サーキット交通教育センターにおける、セーフティ・エコドライブ研修が行われ、同社の社員14名が参加した。

午前中は座学。ふんわりアクセル『eスタート』[※1]、アクセルオフによるフューエルカット[※2]の活用など、エコドライブに必要な知識を学んだ。

午後は、燃費を計測する装置を取り付けたトレーニング車両を参加者一人ひとりが運転。雪道と同じ摩擦係数の低ミュー路を利用して、ふんわりアクセル『eスタート』に必要なアクセル操作を身につける。さらに、午前中に学んだエコドライブに効果のある運転方法を試し、実際に燃費が向上していくことを確認した。

最後は教室に戻って、「eco－KYT」を実施した。これは、交通状況に応じて、エコドライブと安全運転の両立について考えてもらうもの。教室のプロジェクターに、渋滞で停止したクルマの前を右折する時の場面（写真左上参照）が映し出される。「エコドライブのことだけを考えたら、アクセルから足を離し、そのまま曲がっていくのが燃費にはいいと考えられます。でも、それでいいのでしょうか？」とインストラクターが参加者に問いかける。「渋滞しているクルマのカゲから、バイクが来るかもしれないので、そのまま通過するのは危険です」と参加者の一人が答える。最後には「突然、バイクが出てきたら急ブレーキをかけると思います。バックミラーには後方のクルマが映っていますから、このクルマに追突される危険もあります。ここでは、右折を開始する前にアクセルから足を離すだけでなく、ブレーキを踏んで、後続車にも減速を促すことが追突防止になります」とインストラクターがまとめていく。

「もちろん、安全があってのエコドライブです。みなさんが職場で指導する際には、このような点に注意してほしいと思います」。

（株）シーテックの梅田さんは「今回の研修では、当社の求める『セーフティ』と『エコ』の両方をバランスよく学ぶことができましてありがとうございました」という。

1月末までに養成される114名のエコドライブリーダーは、4月から各職場での指導を開始する。

エコドライブと安全運転の両立について考える「eco-KYT」

指定されたコースをエコドライブで走行。その間の燃費を計測し、燃費が向上することを確認。コースの途中には横断歩道手前に停止車両があり、このような場面では一時停止することが事故防止につながることを参加者は再確認した

※1ふんわりアクセル『eスタート』＝普通の発進より少し緩やかに発進すること。最初の5秒で20km/hが目安。
※2フューエルカット＝一定以上のエンジン回転でアクセルから足を離すと燃料の供給が停止される機能。燃料を使わずに走行する距離が伸びるので、平均燃費は向上する。

NEWS REVIEW

●ホンダ輸送グループ安全協議会
平成20年度 年間無事故競争表彰式

輸送現場における交通事故ゼロの取組み

2月10日、日本青年館（東京都新宿区）にて、ホンダ輸送グループ安全協議会の「平成20年度 年間無事故競争表彰式」が開催された。

同協議会は本田技研工業（株）の製品輸送業務に携わる、日本梱包運輸倉庫（株）、ホンダ運送（株）、（株）ホンダロジスティクスで構成され、3社とその協力会社が一体となって、交通事故ゼロをめざすことを目標に、安全運転の啓蒙と意識高揚のための教育・指導・広報活動を行っている。その活動の一環として、年間無事故競争を各社の車両1台当たりの年間無事故走行キロ数で競っている。

平成20年度は、日本梱包運輸倉庫（株）、ホンダ運送（株）の2社が加害事故ゼロを達成。規定の1社あたりの走行距離により日本梱包運輸倉庫（株）が優勝し、同社の黒岩秀隆社長に千葉英雄・本田技研工業（株）安全運転普及本部事務局長から年間優勝杯が授与された。また、ホンダ運送（株）が年間無事故賞を受賞した。

表彰式後には、千葉事務局長が「今後も絶対に事故は出さないという強い信念を持って、交通事故ゼロをめざして取り組んでいただきたい」と挨拶。また、黒岩社長は「さらなる安全心の向上を図り交通事故防止に努めるとともに、お客様に安全かつ高品質な商品が届けられるように努めていきます」と抱負を語った。

TOPICS

●自動車教習所との連携

青森モータースクールでHonda自転車シミュレーターを使った高校生への安全教室を実施

ホンダは、交通安全の活動が地域社会に根ざし、地域社会と一体となって継続的に展開されることを理想として、「指導者の育成」「教育の場と機会の提供」「教育プログラムと手法の開発」「教育機器の開発・提供」を柱とした安全運転普及活動に取り組んでいる。この活動をさらに全国的に展開していくために、昨年からそれぞれの地域で交通安全教育に積極的に取り組む自動車教習所と連携した活動をスタートさせた。現在、21の自動車教習所と連携し、教習所における交通安全活動をサポートしている。

その連携先の1つが、青森モータースクール（青森県青森市、マルエス自工（株））。同教習所では、学生、一般社会人・企業、高齢者に対しての交通安全教室や講話を年200回以上実施するなど、地域の方々への交通安全教育活動を積極的に推進している。

昨年、青森モータースクールで私立東奥学園高等学校（高橋福太郎校長）の3年生2クラスを対象とした『参加体験型安全教室』が開催された。この日の安全教室では、「速度と停止距離」、「負傷者の救護」、「自転車の正しい乗り方」の3課題を実施。「自転車の正しい乗り方」では、ホンダ自転車シミュレーター（以下、シミュレーター）を使った交通安全教育が行われた。

この授業では、代表生徒が携帯電話のメールを操作したり、傘を差したりしながらシミュレーターを体験。体験者のモニター映像がプロジェクターで教室の大きなスクリーンに投影され、他の生徒はその映像を見ながら自転車の乗り方について話し合う。指導する側はコーチング手法を使い、脇見運転や、片手運転の危険性に気づかせる。

同社常務執行役員の松岡義光さんは、「シミュレーターでも、携帯電話を利用しながらの運転や傘差し運転の場面では、運転以外の作業に集中すると、周囲の状況を見ることができないという、実車と同じ傾向が見られました。さらに、シミュレーターの場合は、体験者はそのような行動によって起こり得る事故や危険性を疑似体験できる。また、見学者もその映像に注目し、参加意識が高かったようです。見学者の場合は、自分の運転と置き換えて映像を見たり、クルマのドライバーや歩行者など他の視点からも危険に気づくことができました。シミュレーターは、雨天時にも参加体験型の教室が行えるので活用しやすく感じました」と話す。

シミュレーターの映像をスクリーンに投影し、見学者も一緒に自転車の安全な乗り方を考える

携帯電話を利用しながら自転車に乗車した場合の危険性をシミュレーターで体験

マルエス自工（株）常務執行役員・松岡義光さん

青森では、夏場など通学の際に自転車を利用する生徒も多い。参加した生徒からは、「自転車の乗り方を見直さないとだめだと思った」「今後自転車を運転する時は気をつけて走行したい」といった感想が寄せられた。

松岡常務は、「青森モータースクールでは、初心運転者教育だけでなく、子どもから高齢者まで、それぞれの世代に合った交通安全教育を実施することで、県内全体の事故率を下げることを目標に取り組んでいます。また、青森から全国に発信できる教習所でありたい。全国どの地域でも高いレベルでの交通安全教育ができる体制が必要で、今後も交通安全に対するホンダのハードとソフトの開発・研究・提供を期待しています」と話す。

『参加体験型安全教室』では、シミュレーターの他に「速度と停止距離」、「負傷者の救護」が行われた